

# 『法思想史』

---

(公務員・20代・Y.Y)

法思想史との出会いは、大学生の時に遡る。私は、何となく面白そうだった法思想史ゼミに所属し、民主主義の歴史についてゼミ論を書いた。確か、アリストテレスから始まって、カントやヘーゲル、そしてケルゼン、ハートといった思想家たちについて学んだ。民主主義ひとつをとっても、思想家によって、様々な角度からの考察がなされており、多くの価値観に触れられることが、法思想史の醍醐味だと思った。

本書を読めば、時代とともにあった法思想史の発展を感じることができるだろう。また、本書は、現代の諸課題(環境問題や世界平和、ジェンダー、LGBT)に対して、多面的な角度から考えを巡らせることの大切さを教えてくれる。現代の諸課題を解決していく方法は、ただひとつとは限らないのだという発想を与えてくれる。

内容としては、時代順に主要な思想家が紹介されており、高校時代の倫理の教科書にもう一步踏み込んだ感じであるが、深くまで述べられていない点が取っつきやすく、スラスラと読める。ある思想家について、もっと知りたいと思ったら、末尾に参考図書も豊富に紹介されており、興味をひくものであった。

法律を学んでいる学生さんから、社会人の方まで、法思想史は一度はまるとやみつきになる領域だとおすすめしたい。

『法学教室』2020年4月号(No.475)掲載「Reader's Voice」より